傾奇者・前田慶次の生き方を通して考える

岡本健太郎
(筒井紘一ゼミ)

○現代の傾奇者(暴走族)の減少を、傾奇者前田慶次の生き方の事例から探る

現代の傾奇者（暴走族や愚連隊）というのは，その生き方やその見た目が傾奇者とかなり似ていて，むしろ時代が違うので言い方が違うのだが，元々は同じであるという風にさえ感じさせるのである。現代の暴走族の数は，年々減ってきており警視庁の調べ注①によると，「平成12年にグループ数は60組あり，人数は693人であったのが，平成16年には，グループ数17組，132人にまでに減っている」とある。つまりグループ数では，約四分の一に，人数では約五分の一にまで減っているのである。この減少は振舞い，服装，またそれらを含む，生き方が傾奇者と現代の傾奇者（暴走族や愚連隊）は，似ているが故に，私は傾奇者の最後と現代の傾奇者の減少とは大きく関係があるように感じるのである。そんな中で傾奇者として語られる事が多い前田慶次の傾奇者になった理由や生き方などと，どのような関係があるのかということを，様々な生き方や逸話などの事例から探っていこうと考えている。

○傾奇者について

前田慶次という人物を語る上で，なくてはならないのが，「傾奇者」である。では，傾奇者とはいったいどういった者の事なのであろうか。

傾奇者とは，「カブキ者」や「傾き者」という風にも書かれているのだが，その意味は「傾く」という動詞の意味が，異様な格好(服装など)をし，異様な行動で周りの人を驚かしたりするという意味であるので，傾奇者とはそれらの生き方をした者のことである。『一夢庵風流記』注②によれば「異様な風俗や行動をした者とされ，京・大坂・江戸などの都市に横行し，反体制的な行動にでた武士，または一部の町人であるとされている。また，男の世界は男を立てることからはじまる。立てるとは行為や現象の度合いを際立たせ，目立たせる意味である。他でもなく「男伊達」をさす。精神的に意気を競い，派手に振舞うことである。時代によって呼称も内容も異なるもののその本質は変わらない。安土桃山時代には「かぶき者」といった。異様，異端な身なり，奔放な行動，ふざけ，たわむれなどの意を含むが，元来は“傾（かぶ）く”こと，つまり傾いているわけで，ひと口に曲がっていると理解していい。」注②という風に傾奇者を定義しているのである。このように，常識とはかけ離れた格好（同時の男性は，地味な無地などの羽織袴であったの対し，傾奇者は派手な色の物を纏い，動物の皮などを繋ぎ合わせた物を着ていた）や振る舞いをし，また，傾いていて(かたむいている)捻くれているという意味であったのであろう。そして，それらの傾奇者は当たり前といえば当たり前だが，旗本・御家人が多くを占めていたという事もあり，幕府などの人間にかなり目をつけられていたようである。これらの人々はその他にも，傾奇者は喧嘩など，人前で目立つことが好きであったので，町衆などにも嫌われていたようである。また傾奇者は中流武士の，次男や三男などの者が多いので，その家を継げないなどの理由から屈折し，自分の存在を世間に知らしめるように，傾いたのではないかと考える。多くの人に煙たがられたる，目立つような行動をとることから，現代で例えるのであれば，暴走族などの愚連隊のような存在であったと考えるのが妥当なところだろう。

しかし「傾き」とは現代でも，とても有名で全国各地で行われ，重要無形文化財でもある「歌舞伎」(元々傾くという言葉から，カブキといわれ，それに字があてられ，歌う，舞う，そして伎（技)

という風になったのである）も語源にもなっており，現代では人々に愛されるような存在になっている。このように，「傾く」「傾奇者」などは人々に，煙たがられていた反面，文化的な観点から，魅力的な部分を兼ね備えているのである。このように良い風にも，悪い風にも，とらえられる傾奇者であるが，それをかの有名な加賀の前田利家の甥(前田慶次は，利家の兄，前田利久のもとへ養子として来たので，血はつながっていないのである)であった，前田慶次という人物の生き方を基に具体的に考えていこうと考えている。

なぜ，数多くいた傾奇者の中で，決して有名でもなく，現代でもほとんど知られていない，前田慶次を傾奇者として選んだのかというと，私自身「傾奇者」という言葉を知らなかったのであるが，それを知る事となったきっかけが，『花の慶次・雲のかなたに～』注③という漫画である。この漫画は，『一夢庵風流記』を基にして書かれているということもあり，かなり完成度の高い物なのだが，私は，この物語の主人公である，前田慶次という人物の振る舞いや服装，また，そのなんとも自由で豪快で死をも恐れない強い心に興味を持ち，彼の生き方を調べていく内に(前田慶次の資料は彼が人生を傾き通した為か，あまり多くは残っていない)，彼の生き方は，現代のような世の中で生きる私にとって，「自由」という観点をメインに，生き方全てに感銘を受けたのである。故に傾奇者として，前田慶次を選んだのである。

○前田慶次の生い立ち

前田慶次は先程も述べたように，資料が多くは残っていないので，出生，名前，没年，没した場所などは色々な説があるが，彼は通称，「慶次」(前田利家からの書状より）や「啓二郎」(前田慶次道中日記より）とされるものが，実名は「利益」「利貞」いう説が，最も有力なものである。出生は慶長十年（1605年）になくなったとする『加賀藩資料』によると，生まれたのは逆算で天文二年(1533年）で，「米沢側の資料」によると慶長十七年（1612年）で，享年は七十余才ということなので，この２つの説が，正しければ，おそらく天文二年前後であったのだろう。これは，あの有名な織田信長（1534年生まれ）や豊臣秀吉（1537年生まれ）とほとんど同世代である。

次に，生まれ育ちであるが，生まれは定かではないが，おそらくは滝川家に生を授かったと考えられており，『一夢庵風流記』では，滝川益重の次男という風に書かれていて，これが現代でも最も有力かつ，オーソドックスな考え方である。その後，慶次は前田利家の長兄であった利久が子供に恵まれなかったという事で，養子として30代位で，前田利久の所へ迎えられるのである。長兄の子となったので，そのままいけば前田家の家督継承者となるはずであったが，早くから，利家が信長に仕えていたという事もはたらいて，信長が「前田の当主の座を滝川のような他家の者に渡すことは無用である。又左衛門(前田利家)は幼少より自分の近習として仕えており，戦場において手柄も度々たてている。したがって，又左衛門に前田の家督を渡すがよかろう」(村井重頼覚書より)とし，自分に仕えている利家に家督を譲るように命じたのである。この頃，信長はかなりの権力をもっていたので，従わざるを得なかった。そして，永禄十二年（1569年）十月に家督は利家に譲られることになった為，慶次は養父である，利久ともども，荒子城を退去したのである。この様な絶対的な権力に対して，圧力をかけられるというのは現代でも同じようなことがあり，それは受け入れるという選択肢しか残されていないのである。

私は，前田慶次のこのような不幸な境遇が彼を「傾奇者」という，傾いた(かたむいた)人間にさせたのではないかと考えている。現代でも，ぐれたり，暴れたりするのは，自分の不幸な境遇を背負った者も多いに違いないし（もちろんそういった理由からではない者もいるだろう），彼らはどこか自らの存在を，傾いた行動や風貌をして目立つ事で，自分の周りの人間や世間に対して，誇示しているのではないかと感じる。そういった部分においても極めて傾奇者と現代の傾奇者（愚連隊や暴走族）というのは酷似しているという風に感じるのである。

○『一夢庵風流記』『花の慶次・雲のかなたに～』から見る傾奇者前田慶次

現代で，前田慶次の名前を知っている人はおそらく「とてつもなく長い煙管を持ち，天を衝くよ

うな髷を結い，朱柄の鎧を身にまとい，名馬松風に揺られている」というのが，持っているイメージであろう。しかし，これは『一夢庵風流記』やそれを基に作られた漫画『花の慶次・雲のかなたに～』の中でのイメージである。また，ものすごく強くカッコよく前田慶次というキャラクターが描かれている，ＴＶゲームの「戦国無双」注④でも，この作品が基になっている印象を受ける。それにより歴史に興味のないような若い世代でさえも，前田慶次という人物の，強さや豪快さを知っているので『一夢庵風流記』はとても大きい役割を果たしているのである。

故隆慶一郎氏が描く前田慶次というキャラクターは，一言で言えば，いさぎよい日本男児である。ただし，慶次は言葉を巧みに使い，時には人を欺くといったことをしているのだが，それは自分の身を守る為である，いわゆる「ずるさ」ということではなく，世間を驚かそうという悪戯心からくるものであったようだ。これに加えて行動力を合わせ持ち，言い訳がましいこともせず，自らの行動に責任を持ち，周囲にそれを転嫁することなどをしない，まさに「男」という感じなのである。それに加えなんといっても，最も強調している慶次のイメージは，武士としての「豪傑ぶり」である。このように，『一夢庵風流記』や『花の慶次・雲のかなたに～』などにより，前田慶次という人物は現代の人々の中に，様々なプラスのイメージを植えつけたのである。

次になぜそのようなイメージがついたのかということを『一夢庵風流記』や『花の慶次・雲のかなたに～』を具体的に書いていこうと思う。まず『一夢庵風流記』の物語後半，上杉のために，和平交渉に赴く慶次が，バサラ者(日本中世の南北朝時代の，傾き者のこと)に何が出来るとかのという風に思っている上杉の家老千坂景親に対して「わしはしくじれば死ぬ。お手前のように生きて文句をつけたりはしない。」などのように，清々しいイメージを持たせつつも，大胆さをも兼ね備えた印象を与えているのである。また「大胆さ」という点では，豊臣秀吉が前田利家から「甥に前田慶次という面白い傾奇物がおります」と聞き慶次を呼んだときに，慶次は「天下人であろうとも，人を見せ物のように呼び出すことは，間違っている」と考え，命を懸けて髷を真っ直ぐにではなく，横に結い現れたのである。これに対して秀吉は，「見た目だけ髷を横にするというのは，たいしたことのない傾き方だ」と考えた。しかしその髷の真意は，秀吉に平伏する際に顔を横に背けることで，平伏をしている時に髷は秀吉の方を向いているため，形式上は平伏しているが，本心では顔を背いているという事を表していたのであった。これを見守る前田利家は間違いなく，慶次は切り捨てられると思ったようだが，元々傾奇者であった秀吉はその意味を理解し一言「大儀であった」(大儀であったというのは，もう下がっても良いということである）と言い放ったのである。次に，「豪傑ぶり」を示している部分であるが，これはかなり多く，物語の中で慶次は「伊賀の忍びの出」であるという風な設定になっており，傾奇者が故に何度も命をつけ狙われるという場面が多く出てくるのだが，これを慶次は顔色ひとつ変えずなんなく切り捨てるのである。また天正十二年北陸の佐々木成政は加賀・能登への支配を狙い，前田利家の出城であった末森城を急襲した際に，敵一万五千に対して，味方は五百であったのにも関わらず，「負け戦こそ楽しい」と言い，慶次の親友の中の１人である末森城主，奥村助衛門に対する「儀」の為に１人援軍として末森城へ行き，その中で名馬松風に乗り，「一騎駆け」(馬に騎乗し，先頭を突っ走り相手陣へ突進すること)により，見事に末森城を守りぬいたのである。このように慶次は命を投げ出してまで「義」の為や，自由に生きる為に，傾いたのにも関わらず人生50年という時代に70代まで生きぬいたのは，彼が天に愛されていたとしか言いようのないのではないだろうか。そして最後に『花の慶次・雲のかなたに～』の中での，慶次の恋についてであるが，慶次は自分の養父である利家（慶次と利家の年齢はほとんど同じくらいであった）の正室であるお松のことが好きになってしまうのである。それが故に，慶次と利家はかなり中が悪く描かれているのである。もし，織田信長の一言がなければ，お松は慶次の正室になっていたのかもしれないので，先程も述べたように，慶次は傾いた風になったのはこのような皮肉な歴史がそうさせた可能性があると私は考えている。

『一夢庵風流記』や『花の慶次・雲のかなたに〜』の作者である故隆慶一郎氏は平成11に死去されたのだが，亡くなる前に病院のベッドの上で編集者に「かぶき者の定義はないと思う。戦国時代，国家という意識を地方の権力者が持ちはじめ，統一を目論み，行動に移り，勢力を拡大して支配地域を固め，行政組織をつくる，いわゆる権力による支配体制である。民衆は管理下に置かれ，空の下で，自由ないままでの生き方が遠のいていく，権力体制は次第に強大になり，民衆はその翼の下で萎縮していく。そこで傾奇者の登場である，反体制，反権力の者が，虐げられる民衆の側に立つと喝采が湧き上がる，なかには目立てばよいという単純な発想から異形な姿，形を真似た者もいたが」注⑤と言っている。故隆慶一郎氏が言っているのは，権力者が天下を治め支配していくとそれ以外の人間達はその支配下におかれ不自由で生きづらくなってしまったのである。そんな世の中に反旗を翻したのが傾奇者達ということである。私はこの意見はもっともな意見であるという風に思う。しかし自由を求めるということだけが傾奇者になる理由ではないと思う。なぜなら不自由な世の中でも，境遇の良い人は傾奇者にはならないからである。つまり私が考える傾奇者になる理由は不自由な世の中と自分にとって不利な待遇が揃うということである。これは現代の傾奇者でも同じであると思う。不自由な世の中に不満を持って反発したいという考えに，不利な待遇が重なった時に，人は傾き，そのどちらかが解消されて傾くことをやめるのではないだろうか。たしかに私も故隆氏が述べる様に，ただ目立ちたいから，流行っているからなどの単純な理由で傾く者もかなり多かったということは言うまでもないという風に考えている。

また，故隆慶一郎氏は先程と同じ時に，「豪勇にして豪胆，痛快にして爽快な巨漢前田慶次郎と，馬のなかでも群を抜いて大きな体格をしていた松風と，一心同体になって戦場を駆ける，その服装は目を見張るきらびやかなものである。なぜその服装をするのか。資料を探し，傾奇者の語源を調べてもはっきりしない，傾く目的，それも見当たらない，当世のファッションと解釈するにはあまりに知恵がない。異様さは人の目を惹く，戦場のなかで矢面に立つ，相手の標的になる。真の傾奇者の生き方をもう一度見直したい」注⑤と述べている。この意見はそうであって欲しいといったような願望も混じりつつ，実に的を射ていると思う。慶次は不自由で，本来なら前田家の当主であったはずがそうでなくなったという不遇により，人生というものを，生きる価値のあるものという風にはとれなかったのではないかとさえ思う。それが故に，いつでも自分の命を投げ出す覚悟が出来ていたので，派手な目立つ服装をし，敵の矢面に立つことも彼にとってはどうってことのない行動であったのではないだろうか。もし，自分の命を捨てる覚悟が出来ていなかったら，戦場ではできるだけ目立たない，相手に狙われにくい服装をするのが人間の生きるという本能であると思う。

○前田慶次に関する逸話

次に，慶次に関して残されている逸話について述べる。まず慶次を語る上で必ず出てくるのが，名馬「松風」である。慶次は松風という馬を所有していたのだが，あまりに見事な馬なので，「この馬は誰の馬ですか。」と聞かれるとお付の者に，「この鹿毛と申すは，赤いちょっかい皮袴，茨かかれ鉄甲，鶏のトッサカ立烏帽子，前田慶次が馬にて候」と言わせ，ここでも世間に対して自らの存在を知らしめていたのである。これは『武辺咄聞書』注⑥によると，「前田慶次は松風と云名馬持，京にて夏の比，毎夕川へひやしに遣す。馬取の腰に烏帽子を付けさせたり。路にて往来の大名小名に逢。見事成る馬なれば，立戻り，誰の馬にて有ると尋るに，彼馬取，其儘烏帽子をかぶり足拍子を踏み，此鹿毛と申すはあかひちよつかい皮袴茨かかれ鉄甲，鶏のとつさか立烏帽子，前田慶次か馬にて候と幸若を舞。牽通る人の尋る度々に件の如し。」注⑥という風に記されているのであるが，松風という馬は，人がこの馬は見て「誰の馬か」と尋ねる程に素晴らしい馬であったというのはこれを見ても分かる。それに加え慶次はそれをわざわざ周りの者にアピールしていたのである。これは決して「自慢」というニュアンスのことではなく，むしろ松風に対する礼儀ではないかと思う。慶次は『花の慶次・雲のかなたに〜』の中でもよく松風を一馬としてではなく，話しかけるな

ど人間に接するようにしていたので，彼は松風に対する愛情などが人一倍あった為，松風に対して礼を重んじる為にそのような歌を歌わせたのではないかと考える。

次に慶次が脇差をさしたまま銭湯に行ったということが，『武辺咄聞書』に「或時，慶次，銭湯の風呂へ入。ほふかぶりして忍び入，下帯に一尺計の脇差をさして風呂へ入。入込の輩，すはや曲者よ，爰にて風呂に入らざれば，恐れて入らずといわれんとて，皆脇差をさして風呂に入。数刻入て慶次は板の間へ出，彼小脇差をすらりと抜いたるを見れは，竹の篦也。則足の裏の垢をこそける。入込の人々腹を立て，扨も出し抜に合て大事の脇差共を風呂へさして入。柄も下緒も役に不立。身は汗をかきなまりて皆捨たりと憤りたるとかや。」注⑥とある。これは簡潔に言うと，慶次が銭湯の風呂の中まで脇差を持って入っていた為，それを見た後から入ってきた者は，自分達も脇差をさして風呂へ入ってきたのである。しかし風呂の脱衣所のような所に出た慶次が腰にさしていたのは，竹のへらであった。それを見た侍達は，騙された事に気づいたのだが，気づいた頃には侍達の脇差は柄も湯につかり，刀身も汗をかいてしまって使いものにならなくなっていたのである。この逸話は，まさに人を食ったような慶次らしい印象を与える。これは，かの有名なアニメ「一休さん」のような振る舞いで，とんちの効いた悪戯をするのである。このような悪戯をする理由というのは，先程も述べたように不自由でつまらない人生の暇つぶしのような印象を受けるのである。このように慶次は命を懸けた悪戯を幾度もしてきたのである。

そして，これは有名な話だが，慶次が叔父である利家を風呂と偽って，水風呂に入れたという逸話である。これも『武辺咄聞書』に記されており，「利家は慶次郎が世を憚らさるをひたと叱給ふを，慶次不足に存，此家に久敷居るべからずと思ひ，大息をついて独言しけるは，万戸侯の封といふ共，心に叶はざれば浪人に同じ。只心に叶ふを似万戸侯といふべし。去も止も所を得るを楽と思ふ也。所詮，立退べしと思ひしが，又持病の徒ら心発り唯立退ん無念也と思ひ，利家へ御茶を上んと望む。利家聞給ひ，慶次が心直りて我に茶をくれんと申候と悦べ給ひて，慶次は水風呂へ冷水をたぶたぶと汲入置，茶済て慶次申候。私，風呂を持申さずに付，湯風呂を申付候間，御入成さるべきやと横山山城守を以て伺しかば，利家則風呂屋へ至り給ふ。慶次，湯加減を見て成程能と申上る。利家はだかに成，たふと入給ふに冷水也。利家記つと驚き，其徒らもの遁なと呼給ふに，慶次は松風と云早馬を持ければ，兼て鞍置，裏門に立置しが，其儘打乗て行方知れず成にけり」といったように現代で考えれば，単に叔父に対して行った悪戯のように感じるが，なんと言っても悪戯を働いた相手は前田利家なのである。これは慶次の傾いた行動を世間に対してとるので，利家からそれを厳しく注意されたのが原因で，慶次は「もうこの前田家には，長くは居られない。」と利家を水風呂につけるということを考えついたのである。この傾奇に対し，利家はかなりの権力者であった為，悪戯というだけでは済まされるものではなかったと考えるのが妥当である。最悪の場合は打ち首になり得るような行動である。

しかし，そんな慶次に対してこうした行動を認められる出来事が起こったのである。それは上記で豊臣秀吉に対して，髷を横にして平伏の際に顔を背けたと述べたが，その事とその続きが『重輯雑談』注⑦に描かれているのである。「或時京洛にて，高徳公の甥御に衡着在由，太閤秀吉公聞召て，随分替りたる形にて罷出べし，御目見仰付けらるべしとの事生るに因て，慶次殿髪を片方へ寄て結，虎の皮の肩衣に，袴も異様なるを着し，拝礼の時頭を畳へ横に付平伏せらる。こ此の為に髪を片寄て結て，髪の拝礼の時直になる様に拵たるものと見ゆ。太閤の御意に応じて，偖も替たる男哉と御笑有て，定て彌替りたる仕形仕るべしと思召，御馬一疋下され候間，御前に於いて拝領候へと仰出さる。慶次忝由御請申し，退出して装束を直し，今度は成程くすみたる程に古代に作り，髪をも常に結直し，上下衣服等迄平生に改め，御前へ出で御馬を拝領し，前後進退度に當り，見事なる体也。これに因り太閤は申すに及ばず，末々迄目を驚しける。愈太閤の御意に叶ひ，向後何方にて成とも，心儘に衡に候へと御免の御意を奉りて，以後種々思儘なる衡き事をして一生を送られけると也」と描かれており，途中までは先程述べてい

る内容なのだが，その続きの部分は，慶次の傾いた行動と服装(髷を横に結い，平伏の際に顔を背けた行動と虎の皮の肩衣など)に対して秀吉が馬を一頭とらせると言ったので，慶次は改めてしっかりと正装をして，現れたのである。そして今度は先程とは一変した，秀吉を含む他の大名などが驚く程，しっかりとした礼儀，作法をしたのである。(慶次の生まれは不明だが，前田家の養子になるほどなので，ある程度の家柄であったと推測できる。故に礼儀，作法は教育されていたのである)そして，ここからが天下人が，傾くということを認めるもとになるものなのだが，その慶次の一連の行動を見た秀吉は，慶次に対して「傾奇御免」を認めたのである。これはどこでも，誰の前でも思いのままに傾いてみせてもよいというもので，事実上「傾く」という行動を認められたのである。このように，幕府の人間にさえ嫌がられた傾奇者を天下人が，容認したということなので，これはかなり画期的なことである。現代で言えば内閣総理大臣が，暴走族の中の１人を気に入り違法行為ではないが，モラル違反な問題（例えば，電車の中で，携帯電話で話すなど）を認めるという事と同じなのではないだろうか。たしかに，天下人と内閣総理大臣というのは，権力を握っている力関係が違うので，比較する対象としては，少しずれているかもしれないが，当たらずとも，遠からずといったところであろう。そのように考えると傾奇御免というのを秀吉が認めたということが，あり得ないということが分かる。

そして慶次のこの聚楽第での傾きぶりはおそらく，今までの中で一番といっていいほど，死を覚悟してのことだろう。そして，秀吉もまた自分の前でそのような行為を行う者などいないので，慶次が死を覚悟して来ているということはわかっていたに違いない。それを分かっていてあえて，慶次に傾奇御免を許したのである。この秀吉の行為も傾くという行為なのではないかと思う。

○前田慶次の最後

前田慶次の最後も，出生と同様で「米沢終焉説」「会津終焉説」など何説かあるのだが，その中でも，供養寺や遺品などが多く残っており最も有力な説であるのが，「米沢終焉説」である。「常森善光寺」にある「前田慶次供養塔」の碑文には「前田利貞は加賀藩主前田利家の甥，叔父利久に使えて小田原攻めに参戦，後，己を知る天下唯一の武将として直江兼続を知りその主上景勝公に生涯を託した。慶長五年最上討伐には直江と共に出陣大いに戦い，殿軍をつとめ完全撤退を果たし戦史に名を留めた。後この地常森に居を賜り邸を『無苦庵』とよび悠々自適，この地を深く愛し郷民と親しみ，慶長十七年六月四日七十才の生涯を閉ぢた。慶次は天性豪放磊落奇行に富み文武は勿論広く諸芸道に通じ無苦庵記，道中日記，亀岡文殊奉献和歌がある。」といったように，具体的なことが記されているので，慶次はおそらく，この常森善光寺，前田慶次供養塔がある米沢で最後をむかえたという可能性が強い。

これに描かれているように，慶次は最後に，上杉景勝に仕えたのだが，号を「穀蔵院ひょっと斎」とし，この時はほとんど傾かずに，書物を読み耽っていた（どうしても，慶次は，武功のすごさが先行してしまうのであるが，源氏物語を講釈したり，伊勢物語の秘伝を受けるたりなど，文武両道の侍であった）ようである。なぜ傾かずに，大人しくしていたのであろうか。

その理由を私は，傾奇者になった理由の逆であると考える。傾奇者になる理由は最初の方で述べたように，不自由な世の中，生活と不幸な待遇がそうさせると考えているのだが，慶次はこの時，奥村助衛門と並んで慶次の親友であった「直江兼続」と出会いと，「天下広し，といえども，真の我が主は，景勝のほかは一人もなし。」注⑧といったことが『武辺咄聞書』注⑧に描かれているので，上杉景勝にそうとう惚れこんでいたということが推測できる。また，慶次は上杉家では，自由に過ごすことを前提に仕えていたので，その通り自由に書物などを読み耽っていたのである。慶次は上杉家に仕えるようになってからは，良き親友と良き主に恵まれ，自由に自分の好きな書物などを読んでいたので，慶次はここでは不自由でもなく，不幸な待遇でもなかった，むしろ幸せな日々を送っていたとさえ感じる。つまり，慶次は傾くということをやめようとして，やめたのではなく，傾く理由がなくなったのではないかと考える。傾奇者というのは，本来「傾いた（かたむいた)」存在

であったので，傾こうとして傾くのではなく，不自由さや不幸な待遇によって，自然にそうなっていくのではないかと思う。もちろん，そういった者達ばかりではなく，自然にそうなった者達が一種の流行のようになったので，まがい者もいたにちがいない。

○現代の傾奇者の減少と前田慶次

この慶次が傾き，また傾くのをやめていくというのは，現代の傾奇者が減ってきたのとどのように関係があるのだろうか。現代の傾奇者も不自由さや不幸な待遇などによってそうなってしまったという，同じ理由だと推測できるので，それをやめる理由も同じであると考えられる。最初に述べたように，警視庁の調べによると，暴走族の数は，平成12年にグループ数は60組あり，人数は693人であったのが，平成16年には，グループ数17組，132人にまでに減っている。このように，４年という短い期間の間に，激減している理由は，そのような行為，生き方をする理由がなくなってきているのではないかと考えている。つまり，私が考える傾く理由である不自由さと不幸な待遇のどちらか，もしくはその両方が，平成12年よりも，平成16年の方が，減ってきたからではないかと考える。

具体的な大きな要因として考えられるのが，「ゆとり教育」である。平成14年に学習指導要領の全部改正が行われ，完全学校週５日制が実施された。現代の傾奇者も小学校から中学校までが義務教育なので，６才～15才までの９年間のほとんどを学校で過ごす。そんな中で学校に行くことを楽しいなど，プラスに感じる子もいれば，行くのが辛い，他にやりたいことがあるなど，マイナスに感じている子もいる。例えば，野球選手になりたいという夢を持っている子がいるとする。その子は学校へ行かずに，野球のチームに入り夢の実現の為に努力するという事が，最も彼の夢の実現に近づけるはずである。しかし，現代ではそのような行為は認められていないので，夢の実現に対して自分の意思とは裏腹に，遠回りをしなければならないのである。やりたい事もできず，６才から15才というゴールデンエイジである９年間のほとんどを，学校という所で過ごせば，不自由さを感じるに違いない。そこへ何らか（親の死など）の不幸な待遇が，加われば，自然と人は傾いていくにちがいない。そんな中で，実施された学校完全週５日制により，不自由ではあるがそれまでの仕組みよりも不自由さを感じる子供達の数が減ったのである。そして平成１４年に実施されてから，２年という月日と経てその結果が顕著に表れてきたのではないだろうか。ここでのゆとり教育は前田慶次にとっての，親友直江兼続，良き主上杉景勝，また好きな書物を読むことと同じものなのである。このように，前田慶次が傾くということをやめた事から，現代の傾奇者の減少を推測したのだが，私は傾奇者が好きあるが，彼らは不自由さと不幸な待遇の上になりたっているので，傾奇者という者は現れないに越した事はないと思う。

世の中の人に今なお愛されている前田慶次であるが，その人生は不自由と不幸の連続であり，そんな慶次が最後に掴んだ自由と幸福はわずかの間しかなかったが，素晴らしきものであったに違いない。そんな前田慶次はこれからも人々に愛される存在であってほしいと考えている。

注①：警視庁ホームページより引用
http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/toukei/bunsyo/toukei16/pdf/kt16d105.pdf
注②：「一夢庵風流記」新潮文庫　隆慶一郎（著）
注③：「花の慶次・雲のかなたに～」集英社文庫　隆慶一郎（作）原哲夫（画）麻生未央（脚本）
注④：「花の慶次・雲のかなたに～」の解説部分より引用
注⑤：「戦国無双」コーエーによるＴＶゲームのソフト
注⑥：「武辺咄聞書」延宝八年（1680年）に成立
注⑦：「重輯雑談」成立年代などは不詳
注⑧：「武辺咄聞書」延宝八年成立　より引用